

J. S. バッハ作曲「三声シンフォニア」の楽曲分析と演奏解釈 ——第3番 ニ長調 BWV 789——

藤 本 逸 子

はじめに

この小論に先立ち、「J. S. バッハ作曲『二声インヴェンション』¹⁾の楽曲分析と演奏解釈」²⁾と題し、「第1番 ハ長調 BWV772」から「第11番 ト短調 BWV 782³⁾」までの11曲を、「豊橋短期大学研究紀要 第2号」から「同第12号」の各号に、それぞれ楽曲分析し演奏解釈した。また、「第12番 イ長調 BWV 783」から「第15番 ロ短調 BWV 786」までを、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第14号」から「同第17号」に、同じく楽曲分析し演奏解釈した。続いて、「J. S. バッハ作曲『三声シンフォニア』の楽曲分析と演奏解釈」と題し、「第1番 ハ長調 BWV787」と「第2番 ハ短調 BWV 788」を、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第19号」と「同第20号」に、楽曲分析し演奏解釈した。この小論も、それらと同じ観点にたって、「三声シンフォニア」の「第3番 ニ長調 BWV 789」を取り上げたものである。

楽曲分析と演奏解釈

「W. F. バッハのための小曲集」⁴⁾において、この「Sinfonia 3」にあたるのは、62番目の曲で、「Fantasia 14」(BWV 789)と題されている。「Fantasia 14」は、12⁵⁾までで中断し、以降は欠けている。これを含めて、表 I に示した違いが見られる。

-
- 1) 「二声インヴェンション」と「三声シンフォニア」という呼び名については、豊橋短期大学研究紀要第2号「J. S. バッハ作曲『二声インヴェンション』の楽曲分析と演奏解釈」藤本逸子 1985年(以下「第2号における小論」)の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。
 - 2) 作品名・書名・強調語句は、原則として「 」に入れて表わす。
 - 3) BWV=Bach-Werke-Verzeichnis, W. シュミーダーによるJ. S. バッハ作品総目録番号。
 - 4) 「W. F. バッハのための小曲集」については、「第2号における小論」の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。
 - 5) 小節数は、数字を□で囲むことによって表わす。例、第4小節め→4、第3小節めから第10小節め→3~10。

表 I 「Sinfonia 3」と「Fantasia 14」の相違箇所

Sinfonia 3	Fantasia 14
9 中声3拍め Fis音 ⁶⁾	9 中声3拍め Fis音 Fis音 12～ 12で中断し、以降は書かれていない

楽 曲 分 析 (譜¹⁷⁾ 参照)

この曲は、二つの部分からなり、それぞれの部分は、次のような構成になっている。

第1部 1～14 (13.5)

主 題 1～3 (2.5)

主 題 3～5 (2.5)

主 題 6～8 (2)

間奏1 8～10 (2)

主 題 10～12 (2)

間奏2 12～14 (2.5)

第2部 14～25 (11.5)

間奏3 14～19 (4.5)

主 題 19～21 (2.5)

主 題 21～23 (2.5)

主 題 23～25 (2.5)

各部分における楽曲分析

第1部

主 題

1～3・1～3 上声部に主題 (T) が現われる。(T) は、十六分音符と八分音符で順次上行する3度の動きと八分音符で6度跳躍下行し2度上行する動きの要素 (a) が、3回ゼクエンツしている部分 (A) と、十六分音符で順次下降する4度の動きの (b) が、2回ゼクエンツする部分 (B) からなっている。3では、後半に (b) の反行形 (q) が使われている (c) が (T) に続き、D dur⁸⁾ から A dur に転調している。(c) は、(T) を構成はしていないが、多少の変形を伴って (T) 間の転調を導いたり、間奏で活躍する重要な要素である。ここで奏される (T) が、本曲における最高音域の (T) である。

- ・ 1～2 中声部は、休止している。
- ・ 1～3 下声部は、主音を響かした後、上声部 (T) の (A) の八分音符が2度下行する動きに対して反行する形で、八分音符と四分音符で和声的支えを行っている。上声部 (T) の (B) に対しては、カデンツのバス音の動き (K) をし、主調

6) 音名は、原則としてドイツ音名で表わす。例、変ロ音→B音、嬰ヘ音→Fis音。

7) この小論における「Sinfonia 3」に関する楽譜は、Johann Sebastian Bach「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Barenreiter-Verlag, Kassel 1972) を用いている。国内においては、ベーレンライター社の許可を得て、全音楽譜出版社が、印刷出版している。

8) 調名は、原則として、ドイツ音名を用い、ドイツ音名の大文字は長調、小文字は短調を表わす。例、ハ長調→C dur あるいはC;、イ短調→a moll あるいはa:。

D durを確固たるものにしてている。上声部 (c) に対しては、(b) の拡大した形 (b×) をとり、八分音符の動きとなっている。

主 題

- ③～⑤・③～⑤上声部は、(b×) をより拡大した動き (b××) で中声部 (T) の (A) に対している。中声部 (T) の (B) に対しては、前半は (b) で添い、後半は (K) 的の動きになり、A durに終わっている。
- ③～⑤中声部は、(T) をA durで奏でている。(T) に続く (c) で下声部と協力し、A durからD durに戻っている。
- ③～⑤下声部は、(q) と (b) からなる音形が、中声部 (T) にそってゼクエンツし、(T) の対旋律 (G) となっている。中声部 (T) の (B) に対しては、A durの (K) のバスの動きをしている。

主 題

- ⑥～⑧・⑥～⑧上声部は、③～⑤下声部における③～⑤中声部の (T) に対する (G) 同様、下声部 (T) に対する (G) となっている。ただし (K) 的の動きや転調する動きはせず、D durのまま「間奏1」に至っている。
- ⑥～⑧中声部は、③～⑤上声部同様に、(b) が大きく拡大した (b××) で下声部 (T) の (A) に対している。下声部 (T) の (B) に対しては、(b) で添い、上声部と同じように「間奏1」に入っていく。
- ③～⑤下声部は、(T) である。①～③上声部と同じD durの (T) を2オクターブ下で、奏でている。この (T) が、本曲の最低音域の (T) である。

間奏1

- ⑧～⑩・⑧～⑩上声部は、新しい要素 (d) が出てくる。(d) は、4度跳躍上行・2度上行・3度跳躍下行の動きを八分音符・付点八分音符・十六分音符・十六分音符の組み合わせで行っている。この音程の動きは、(a) と (b) によって導き出されている。この (d) と (T) に続いて出てきていた (c) で「間奏1」を構成し、(d) (c) (d) (c) と並んでいる。
- ⑧～⑩中声部は、(c) と和声的支えとなる長音を鳴らし、h mollへの転調を導き出している。
- ⑧～⑩下声部は、(c) (d) (c) (d) と並び、上声部と掛け合いになっている。
- ⑧～⑩の間、D durからh mollに転調している。

主 題

- ⑩～⑫・⑩～⑫上声部は、h mollで、(T) を奏でている。
- ⑩～⑫中声部は、(q) と (b) の組み合わせによる (G) の後、(q) を二つを続け、「間奏2」に入っている。
- ⑩～⑫下声部は、(b××) の後に (q) を鳴らし、「間奏2」に続いて入っている。

間奏2

- ⑫～⑭・⑫～⑭上声部は、(c) の後に (q) と四分音符の組み合わせを3回続け、最後

に (b) と四分音符と八分音符を置いて第1部を fis moll で閉じている。

- ・ [12]～[14] 中声部は、(b×) の後に四分音符と (b) の組み合わせを4回続け、上声部と掛け合う形で第1部を終えている。
- ・ [12]～[14] 下声部は、H音・A音を長く伸ばした後、(b) (q) (a) (K) と続き、第1部を終えている。
- ・ [12]～[14] の間、h moll から fis moll に転調している。

第2部

間奏3

- ・ [14]～[19] [14]～[19] 上声部は、(a) に四分音符が続き、(b) が3回出る。つなぎの十六分音符の動きの後に (a) を置いてA音で伸ばし、(c) (q) (b) (q) と続いている。
- ・ [14]～[19] 中声部は、休符の後、[15]から長いH音をはさみ (a) が2回出てくる。四分音符の後、(b) が2回出、休符を挟んで、(a) がもう1度出てくる。
- ・ [14]～[19] 下声部は、(a) と (q) の要素を組み合わせたとと思われる音形 (a+q) に (a) が続く形が2回ゼクエンツし、その後 (a) とD音の保続音が続いている。
- ・ [14]～[19] の間、(a) の動きで大きく三つの部分に分かれる。一部は、(a) が上声部・中声部・下声部と出る [14]～[16] である。ここは、D dur で始まり e moll に転調している。2部は、(a) が中声部・上声部・下声部と [16]～[17] である。ここは、e moll で始まり D dur に転調している。3部は、(a) が下声部・中声部と出る [17]～[18] である。ここは、G dur である。このように「間奏2」では、めまぐるしく転調している。

主題

- ・ [19]～[21] [19]～[21] 上声部は、(b××) の後に (K) を置き、その後 (q) (b) が続いている。
- ・ [19]～[21] 中声部は、(b) (q) (b) (q) (b) と並び、下声部の (T) に対する (G) となっている。
- ・ [19]～[21] 下声部は、G dur で (T) を置き、(c) がそれに続いている。この (c) で、G dur から D dur に転調している。

主題

- ・ [21]～[23] [21]～[23] 上声部は、(b) (q) (b) (q) (b) (b) の並びに D dur の (K) 的動きが続く。
- ・ [21]～[23] 中声部は、D dur で (T) を置いている。ここには、(c) がない。
- ・ [21]～[23] 下声部は、(b××) に (q) (b) が続き、次の主題の (G) につながっている。

主題

- ・ [23]～[25] [23]～[25] 上声部は、主調 D dur で (T) を高らかに鳴らしている。[25] では、(b) を一つだけにし、導音の Cis 音を四分音符で置いて主音を導き、あっさり曲を閉じている。

- ・ [23]～[25]中声部は、(b××)の後に上声部を補うが如く (b) (b) と続け、第3音に入って、曲を閉じている。
- ・ [23]～[25]下声部は、(q) (b) (q) (b) (q) (b) (q) (b) と並んで、上声部の (T) に対する (G) を果たした後、典型的な (K) 音形で堂々と曲を終えている。

演奏解釈 (譜2参照)

テンポ

テンポに関して、諸校訂版⁹⁾は、表IIのような指示をしている。

表II 諸校訂版における「Sinfonia 3」のテンポに関する指示

校訂者	テンポに関する指示
Hans Bischoff	Allegretto grazioso ♩ = 76
Ferruccio Busoni	Vivace quasi allegro
Alfredo Casella	Allegretto vivace
S.A.Durand	Grazioso
James Friskin	Allegretto ♩ = 80
Vilém Kurz	Allegretto piacevole
Wm.Mason	Allegretto grazioso
G. E. Moroni	Allegro moderato ♩ = 92
Bruno Mugellini	Allegretto grazioso ♩ = 80
Julius Rötgen	Allegretto ♩ = 76
井口 基成	Allegretto
千倉 八郎	Allegretto ♩ = 80

また、内外10人の演奏時間は、表IIIのとおりである。

表III 諸演奏家における「Sinfonia 3」の演奏時間

演奏者	録音年	楽器	演奏時間
Aldo Ciccolini	不明	ピアノ	1' 22"
Christoph Eschenbach	1974年	ピアノ	1' 12"
Glenn Gould	1963～64年	ピアノ	1' 08"
Tatyana Nikolayeva	1977年	ピアノ	1' 18"
András Schiff	1982～83年	ピアノ	1' 10"
高橋 悠治	1977～78年	ピアノ	1' 18"
田村 宏	不明	ピアノ	1' 18"
Kenneth Gilbert	1984年	チェンバロ	1' 34"
Gustav Leonhardt	1974年	チェンバロ	1' 33"
Helmut Walch	1961年	チェンバロ	1' 40"

9) 各校訂版及び、各CDの出版については、本小論の「参考文献・参考楽譜・参考CD」の項を参照のこと。

軽やかな演奏が多い中であって、ヴァルハの何のてらいもない堂々とした演奏に心打たれた。チッコリーニ、シフ、高橋らが装飾音符を入れて演奏している。特に高橋は多くの装飾音を用いているが、この演奏テンポならば装飾音がない方がクリアに聞こえるのではないだろうか。いつも意表を突く演奏で楽しませてくれるグールドは、意外にも素直な演奏であった。

筆者は、「Allegretto ♩ = 80」というテンポをとる。軽やかで少々コケティッシュな表現から、堂々とした表現まで幅広く楽しみたい。

アーティキュレーション

スラーを記していない音符はノンレガートに演奏する。区切りを感じるころには、「譜2」に（|）を記した。

装飾音

筆者は、装飾音の必要を感じない。

各部分における演奏解釈

- ①～③・*P*で、始める。この*P*は、緊張感のある*P*ではなく、愛らしい意味合いの*P*である。
- ・上声部（T）は、スラーとノンレガートのアーティキュレーションを生かし、少々コケティッシュに魅力的に奏したい。（b）部分を細かく *cresc. dim.* し、（c）は音の上行する動きに合わせて少々 *cresc.* する。
 - ・下声部は、四分音符を充分のばし、上声部の（T）を支える。
- ③～⑤・楽器が増えて音量が増したという感じの *mP* とする。
- ・上声部は、長い音をしっかり保ち、⑤では、A音に向かって少し *cresc.* する。
 - ・中声部は、①～③の上声部に準じて、*mP* で（T）を奏する。ただし、愛らしくコケティッシュにではなく、落ち着きを持った表現とする。
 - ・下声部は、（q）（b）の上行下行の動きに合わせて、細かく *cresc. dim.* する。
- ⑥～⑧・*f*で奏する。強くエネルギッシュな *f*ではなく、下声部に出てくる（T）を野太く豊かに響かせたいための *f*である。
- ・上声部は、③～⑤の下声部に準じて *cresc. dim.* する。
 - ・中声部は、長い音符をしっかり保ち、⑦の（b）（b）で少し *dim.* する。
 - ・下声部は、（T）を野太く豊かに響かせる。⑦の（b）（b）では、中声部と同じように少し *dim.* する。
- ⑧～⑩・少し音量を落として *mP* とする。細やかに *cresc. dim.* をつけて（c）を歌い、上声部と下声部で、（c）と（d）の掛け合いを楽しみたい。
- ・上声部は、（c）を少々控えめの音量として、新しく登場した（d）のリズムを楽しむように下声部と掛け合いをする。

- ・ 中声部は、下声部にそって *cresc. dim.* をつける。
 - ・ 下声部は、上声部に準じて (c) と (d) を奏し、上声部との掛け合いを楽しむ。
- 10～12
- ・ 短調で奏される最初の (T) である。 *mf* で、少し鬱屈したくぐもった表現をしたい。
 - ・ 上声部は、少々重みを持った (T) にする。(b) (b) で少し *cresc.* し、「間奏2」に繋いでいく。
 - ・ 中声部と下声部で、音が蠢いているように *cresc. dim.* をつけ、上声部の (T) をその上にのせる。
- 12～14
- ・ 強めの *mf* で始まる。上声部と中声部の (q) (b) のかたまり毎に音量を下げていき、1部の最後は *P* で終わる。
 - ・ 上声部は、中声部とよく連携をとって、(q) を細かく *cresc.* しながら、全体的には音量を下げていく。
 - ・ 中声部は、(b) に細かく *dim.* をつける。上声部の (q) とセットになって、「間奏2」全体を *dim.* していく。
 - ・ 下声部は、長い音符をしっかりと保った後、上声部と中声部にそって *dim.* し、第1部を静かに終わらせる。
- 14～19
- ・ 気分を変え、大らかな *f* で第2部を始める。各声部に出現する (a) の三つ・三つ・二つの塊を意識し、躍動的に (a) の動きを表現する。また、この (a) の塊毎に繰り広げられる転調の調性感を充分楽しむ。この塊毎に、*mf*・*mP* と、音量を下げ、18で少し *dim.* して、「間奏3」を収める。
- 19～21
- ・ *mf* で奏する。6～8 とほぼ同様な表現をするが、(T) の音域が6～8ほど低くないので、野太さは控えめにする。上声部と中声部の役割は、6～8と逆になっている。下声部には、6～8にはない (c) が (T) に続く。ここでは、少し *cresc.* するが最後のD音には静かに収める。(c) と同時に奏される上声部の (b) は、この (c) にそって *cresc. dim.* する。
- 21～23
- ・ 3～5 と同様に *mP* で、落ち着いた雰囲気表現する。3～5とは、上声部と下声部の役割が逆になっており、下声部に長く保たれる音がある。それによって、3～5にまして、落ち着きに気品が加わった表現が可能である。23中声部の (T) の (b) (b) は、その動きにそって *cresc.* し、最後の主題につなげていく。この (b) (b) と同時に奏される上声部及び下声部も、これに準じる。
- 23～25
- ・ *f* で奏する。
 - ・ 上声部の (T) は、何の憂いもなく高らかに歌い上げ、余分なものを一切廃した終止形で、堂々と曲を閉じる。
 - ・ 中声部は、しっかりと音を保持した後、(b) (b) で豊かに動いて最後の音に収まる。
 - ・ 下声部の (q) (b) は充分細かい *cresc. dim.* を表現し、最後のカデンツでは満足げにバス音を響かせ、曲を収める。

おわりに

「Sinfonia 3」は、魅力に富んだ曲である。筆者は、曲の出だしに、初々しい若い乙女を感じる。曲の途中は、彼女がいろいろな経験を経て成長していく過程である。最後は堂々と自信に満ちた貴婦人を感じさせて、曲が終わっている。いわば、「Sinfonia」版、「女の愛と生涯」である。バッハは、たった25小節の短い曲に、人生を凝縮させている。この「Sinfonia 3」で、バッハの偉大さに改めて気づかされた。これから「Sinfonia」を楽曲分析し演奏解釈する中で、どのような人生に出会えるか楽しみである。

譜1 「Sinfonia 3」 BWV 789 [1]~[25] (楽曲分析)

主題

1

3° 2° A B K

a a a b b q

主題

D: → A:

4

b x x

a a b b c

q q q b c

A: → D:

6 主題

G

b b b b

b x x a a b

D:

8 間奏1

d c d c

4° 2° 3°

c c c

D: → h:

10 主題

T

a a a b b

G

h:

b x x q

12 間奏2

c q q q

b b b b

h: → fis:

間奏3

14

fis:→D:→e:
K a+q

16

e:→D:→G:
a+q a

18

G: 主題 b××

20

G:→D: 主題

22

D: 主題 b××

24

D: G K 主題

譜2 「Sinfonia 3」 BWV 789 ①～②⑤ (演奏解釈)

1 *p* *mp*

4

6 *f* *simile*

8 *mp* *p* *mp* *p*

10 *mf*

12 *simile*

14

p *f*

少々テンポ
をゆるめる

16

mf *mp*

18

mf

ほんの少々落ち着く程度にテンポをゆるめる

20

simile *mp*

22

simile *f*

simile

24

テンポをゆるめ堂々と

参考文献・参考楽譜・参考CD***参考文献**

- 市田儀一郎 1983年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(音楽之友社)
 山崎 孝 1984年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(ムジカノーヴァ)

***参考楽譜**

原典版

- Johann Sebastian Bach 「Klavierbüchlein für Wilhelm Friedemann Bach」 Urtext (Bärenreiter-Verlag, Kassel 1979)
 Johann Sebastian Bach 「TWO- and THREE-PART INVENTIONS」 Facsimile of the Autograph Manuscript (Dover Publications, Inc., New York 1978)
 BACH 「Inventionen und Sinfonien」 Urtext (Bärenreiter-Verlag, Kassel 1972)
 J. S. BACH 「Inventionen Sinfonien」 Urtext (G. Henle Verlag, München 1978)
 BACH 「INVENTIONEN UND SINFONIEN」 Urtext (C. F. Peters coporation, Frankfurt 1933)
 J. S. Bach 「Inventionen und Sinfonien」 Urtext (Musikverlag Ges. m.b. H&Co., K.G., Wien 1973)
 バッハ「インヴェンションとシンフォニア」原典版 角倉一朗校訂 (カワイ出版 1983)
 バッハ「インヴェンションとシンフォニア」原典版 長岡敏夫編 (音楽之友社 1965)

校訂版

- J. S. BACH 「15 SYMPHONIEN」 Hans Bischoff (Steingraber Verlag, Offenbach/M)
 BACH 「TOW-and Three-Part Inventions」 Ferruccio Busoni (G. Schirmer, New York 1967)
 J. S. BACH 「Dreistimme Inventionen」 Ferruccio Busoni (Breitkopf & Härtel Weisbaden)
 BACH 「INVENTIONI TRE VOICI」 Alfredo Casella (Edizioni Curci Milano 1946)
 J. S. BACH 「Inventions à 2 et 3 voix」 Durand S.A. (Editions Musicales, Paris 1957)
 J. S. BACH 「Three-Part Inventions」 James Friskin (J. Fischer & Bro. Belwin Mills 1970)
 JOH. SEB. BACH 「15 Dreistimmige Inventionen (Sinfonien)」 Alfred Kreutz (B. Schott's Sohnen Mainz 1950)
 BACH 「DVOUHLASÉ INVENCE A TRÍHLASÉ SINFONIE」 Vilem Kurz (Editio Supraphon, Praha 1981)
 BACH 「Three-Part Inventions」 WM. Mason (G. Schirmer Inc New York 1967)
 BACH 「15 INVENTIONI A 3VOICI」 G. E. Moroni (Carisch S.p.a. Milano 1981)
 BACH 「INVENTIONI A TRE VOICI」 Bruno Mugellini (Ricordi 1983)
 JOH. SEB. BACH 「ZWEI-UND DREISTIMMIGE INVENTIONEN」 Julius Rötgen (Universal Edition, Hungary 1951)
 バッハ「二声部インヴェンション 三声部インヴェンション 小前奏曲・小フーガ」バッハ集4 井口基成 (春秋社 1983)
 バッハ「インヴェンション」(音楽之友社 1955)
 バッハ「インヴェンション」全音楽譜出版社出版部編 (全音楽譜出版社)
 バッハ「インヴェンション&シンフォニア」ピアノ指導講座7 千倉八郎編 (日音楽譜出版社 1983)
 バッハ「インヴェンション&シンフォニア 解釈と奏法」千倉八郎編 (日音楽譜出版社 1983)
 J. S. バッハ「インヴェンションとシンフォニア」Hans Bischoff 角倉一朗訳 (全音楽譜出版社 1972)

***参考CD**

- Aldo Ciccolini (Piano) 「J. S. BACH INVENTION」 TOCE6601 (TOSHIBA EMI)
 Christoph Eschenbach (Piano) 1979 「INVENTION & SINFONIA」 F26G20323 (POLYDOR)
 Glenn Gould (Piano) 1989 「BACH INVENTIONS & SINFONIAS」 28DC5246 (CBS SONY)
 Tatyana Nikolayeva (Piano) 1986 「J. S. Bach INVENTIONS AND SINFONIAS」 VDC-1079

(VICTOR)

Andárs Schiff (Piano) 1985 「J. S. BACH 2 & 3 PART INVENTIONS」 FOOL-23100 (POLYDOR)

高橋悠治 (Piano) 1991 「インヴェンションとシンフォニア 他」 COCO-7967 (NIPPON COLUMBIA)

田村 宏 (Piano) 1989 「J. S. バッハ インヴェンション」 CG-3722 (NIPPON COLUMBIA)

Kenneth Gilbert (Cembalo) 1985 「J. S. BACH INVENTIONEN UND SINFONIEN」 POCA-2113

(ARCHIV)

Gustav Leonhardt (Cembalo) 1992 「バッハ：インヴェンションとシンフォニア」 BVCC-1863 (BMG

VICTOR)

Helmut Walcha (Ammer-cembalo) 1961 「J. S. バッハ／2声部のためのインヴェンション&3声部
のためのシンフォニア」 TOCE-7231 (TOSHIBA EMI)